

理想の果てに

災厄被害者担当 ティールウルフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不定期更新
頑張るわ。

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
63	53	45	34	25	14	5	1

目次

第1話

□〈へノズの森林〉 グレン

〈Infinite Dendrogram〉を始めたのは理由は暇だったからだ。

二月上旬という他の高校よりもはるかに早い時期に突入した春休み、新学期が始まるまでの約二ヶ月間が与えられた春休みだった。遊ぶ友達はいないわけでは無い、むしろ普通程度には多いと思う。だが結果として遊びに誘ったメールに帰って来たのは、全て断りの返事だった。

曰く、「天地でSUBMが出現して忙しい」

曰く、「クランでマーシャルの新型を創るから」

曰く、「アムニールでのコンサートは外せない」

などといった内容だった。

別に友達がいらないわけでは無い、友達がいらないわけでは無い。

彼らは俺とのリアルよりも〈Infinite Dendrogram〉をとっただけの事なのだ。

二度では足りぬ、もう一度言おう、俺に友達がいらないわけでは無い。しかしそれは俺が〈Infinite Dendrogram〉に興味を持つきっかけとしては十分な理由になるだろう。

〈Infinite Dendrogram〉内では現実の三倍の時間を過ごせるだけではなく、エンブリオという無限の可能性と約束されたオンリーワン性。

そして何よりその五感に伝わるリアルさは何度も噂に聞くほどだ。一年前は高校に進学したばかりで不安なことが多かったので諦めたが今はその心配もない。

〈Infinite Dendrogram〉を始める事を決めた俺の行動は早かった。

少し高くなり貯蓄が出来た貯金を切り崩し、VRマシンを買う。

今更始めたところでスタートダッシュも何も無いので、ネットでの情報収集もしつかりと行い基本知識はあらかた頭に叩き込んだ。

かくして全て順調に進んでいた……はずだった。

「……」

「あれっ？ 聞いてるか、マスター!？」

チュートリアルでの担当である管理AIはチェシヤと言う猫もどきだった。チュートリアルでは大体チェシヤが担当らしい。他の管理AIが担当の時もあるが結構レアケースのようだ。

様々な細かな設定も時間はかからず進んだし、チェシヤとも少し仲良くなった。

あえて他の人との違いを上げるとすれば、初心者では扱いにくいという槍を初期装備に選んだこと。

スタート地点である所属国をアルター王国にしたことぐらいだろう。

所属国をアルター王国にしたのは深い意味はない。親友がいない国であり、ついこの間に起きた戦争と「三極竜 グローリア」というSUBMによって国が半壊しマスターが激滅したからだ。

後半のマスターが激滅したからという理由は、一人でのんびりとプレイしたかったからだ。

「はあ……」

「え、何でため息なんてついてるだよ。もしかして私がマスターのエンブリオだったのが不満だったっていうのか!？」

チュートリアルが終わってからは凄かった。

本当に感動したときには何も出ないというがあれは本当なのだろう。

顔を吹き抜ける風。

確かに感じる地面の感触。

王都に広がる少し活気がなくなった雰囲気すらもリアルに感じる。今でも言いあらわそうしても「すげえ」しか口から出てこない。

新たな俺の……『グレン』としての人生。

中世ヨーロッパの街並みのような王都を観光し、ティアンと呼ばれるへInfinite Dendrogramにおける現地人の人々と話もした。

ジョブクリスタルでは、武器に槍を選んだことから【ランサー槍士】に就いた。

特に目立ったこともない、普通を選択。

ここまでの行動で俺は特別な事をしたとは思っていない。

大多数のマスターがとりそうな行動だ。

特別な行動と言えば……へノズの森林で【テイルウルフ】に襲われていた子供のティアンを助けた事ぐらいだろうか。

【槍士】という就きたてのジョブに初めて扱う武器である槍、エンブリオが第0形態で孵化さえしていなかった俺は結果的に死にかけた。体中傷だらけになりながらのギリギリの勝利。

子供のティアンを助けたのは成り行きだった。

初めてのモンスターとの戦闘でどの程度戦えるか分からなかったから。

【テイルウルフ】が一体だけという好条件だったから。

何より俺は……マスターは死んでも復活できるから。

本当にその程度の理由だ。

「おい、もしかして私の名前を聞いていなかったのか？

しょうがないマスターだなあ、もう一度ゆっくり言うぞ？」
だからこそ分からない。

「私の名前は、【護鎧乙女 アテナ】！」

「はあ……」

ゲームだと認識し、ティアンをNPCのように思っている俺のパー

ソナルから孵化したエンブリオが、

「Type：メイデン withアームズのアテナだぜ！ これからよろしくな、マスター！」

『メイデン』になってしまったのかが。

第2話

□〈へノズの森林〉 「槍士」 グレン

辺り一面に木々が生え並び、初心者向けのモンスターが数多く生息するへノズの森林〉。

周囲からは見えずともモンスターの唸り声や他のへマスター〉達の戦闘音が聞こえてくる。

そんな中、俺の周りには二人の子供の姿があった。

一人は大きな大木を背に蹲る子供。

俺が先ほど「ティールウルフ」から助け出したティアンの子供だ。

一人は俺の目の前で見上げるようにドヤ顔で腕を組む少女。

日の光にキラキラと反射するロングヘアの金髪に澄んだ青い瞳。

頭には古代のスパルタ兵の兜によく酷似した装飾の兜をかぶり、白いドレスのような服をたなびかせている。

言うまでもない、俺の〈へエンブリオ〉である「護鎧乙女 アテナ」である少女だ。

「……ところで何でだ？」

「はあ、聞いていなかったのかマスター？」

私も何度も言うのは嫌なんだけど……今回は特別だぜ！ Ty

pe:メイデン with アームズの「護鎧乙女 アテナ」だ、よろしくなマスター！」

呆れた様子で元気よく再び名乗るアテナ。

その様子は見えていて微笑ましいものがあるがそうではない。

問題なのは、

「……そうじゃなくて、何で俺の〈へエンブリオ〉がレアカテゴリの『メイデン』かって話だ」

〈Infinite Dendrogram〉を始める前によく調べておいたおかげだろう。俺はレアカテゴリーに属する『メイデン』の意味もよく知っている。

メイデンとは他の五つのカテゴリーに加えて付くことがあるハイブリッド型。

基本形態が人型の女性であり、その生まれる為のパーソナル故か強敵を倒すのに適した強者打破系ジャイアントキリングの能力を持つことが多い。

ここまでは別に問題は無い。むしろレアカテゴリーであり、強者打破系という珍しい力を手に入れられて喜ぶところだ。

だが、俺にとって『メイデン』が生まれるパーソナルに問題がある。それは、

『Infinite Dendrogram』の世界をゲームだと思っていない、もしくは〈Infinite Dendrogram〉での命が現実世界と同じ重さを持つ』と考える人に稀に発現する。だからこそありえない、俺は〈Infinite Dendrogram〉をゲームだと認識しているしティアンもNPCだと理解しているのだから。

「なんだよマスター、私がメイデンだったのが嫌だつて言うのか？」

「普通は涙を流して喜ぶところなんだぜ？」

不服そうに睨みつけてくるアテナ。

もしかして怒っているのかもしれないが全くもって怖くない。

「……違いよ。なんで俺からメイデンが発現したのか不思議に思っただけだ」

「ほんとにそれだけか？」

「……あと、メイデンってなんか重たそうだなって」

「なっ!! それは私が重い女つて言いたいのか!?!」

そんな事は言ってはいないが……。
まあ意味としては同じだろう。

「なおの事悪いわ!!」

しまった、意識が共有されるなんて書いてあったがこれの事か。
よくよく考えれば戦闘中に一々言葉を交わすのはかなり手間だ、メイデンには必須の能力といったところか。

しかし【護鎧乙女 アテナ】とは少しゴロが悪い。

アテナと呼ぶのどこか違和感を感じてしようがない、できれば略称で呼びたいところだ。

アテナ……アテナ？ いや、普通にアナでいいだろう。

「……これからお前の事はアナって呼ぶから」

「おう！ 意外とマスターはガツガツくる系なんだな！

だがいいぞ、私はそっちの方が好きだ」

……やはり俺のへエンブリオへは少し頭が弱いらしい。

これは俺が面倒を見ろという事なのだろうか。

目の前で顔を真っ赤にして怒りだしたアナを傍目に考える。

「くうう、まあいい。

それよりその子供はずっと泣きじやくつているが大丈夫なのか？」

「……忘れてた」

なんだかんだで自身のへエンブリオへに夢中になっていた。

今の俺にはとてもじゃないがモンスターと戦える余力が無い。

先ほどの【テイルルルフ】との戦闘で体中傷だらけだし、HPも半分を切っている。一対一ならともかくモンスターの群れを相手にテイアンを守りながらというのは不可能だ。

HP回復ポーションも買ってはあるが三つしかない。
できるだけ早くへノズの森林へを抜けてアルテラに送り届けなければ。

「残念ながら思う通りにはいかないようだぞ、マスター？」

「……ああ、気づいてるよ」

不敵に笑うアナを一瞥しながら、数少ないHP回復ポーションを一口に飲み干した。

地面に突き刺していた槍を握るのとタイミングを同じくしてそいつ等が姿を現す。

「GURUUUUU！」

木の陰から出てきたのは既知のモンスター、「テイルウルフ」。違うのは数。

聞こえてくる唸り声は三つ。

姿を表した「テイルウルフ」は三体だ。

一体でギリギリ、三体もいるとなれば守る事はおろか倒しきれるかも怪しい。

しかしそれは、先ほどまでの俺ならば……だ。

「……おい、お前と俺で勝てると思うか？」

「へッ！ 愚問だぜ、マスター」

その声には一切の迷いも疑いもない。

まるで自身が負けることなど想像もしていないかのように。

「……ああ、そうだな。その通りだ。勝つぞ、アナ」

返事は聞こえない。

だがそれでいい、今、この瞬間において言葉は不要だ。互いに胸の奥で熱い思いを感じ取っているのなら。槍を一回転、眼前に突き出すように構えをとる。その動きに呼応するかのように光の粒子が体を覆っていく。

「……なるほど、護^ゴ鎧^{ヨロイ}ね」

光の粒子が収束すると同時に現れたのは全身鎧。

両腕の深紅の籠手、そして胴体からつま先まで一つながりになるように真紅の鎧が装着されていた。

唯一鎧が無いのは胴体から籠手にかけての脇、そして頭ぐらいだろう。

形態としては古代スパルタ兵の完全武装に近い。

「……それにしてもやけに精巧な作りだな」

籠手だけでもただの一枚の金属から出来ておらず、いくつもの金属が繋ぎ合わさるようになっている。籠手を付けたまま細かい作業が出来るのではないかと思うほどだ。

加えて軽い。

明らかに金属鎧の重さではないだろう。

そもそも全身鎧なんて金属で出来ていたら歩くのさえままならぬ。とても実践向きではないはずだ。

だが今の俺は問題なく動くことが出来る。

〈エンブリオ〉である【護鎧乙女 アテナ】の能力か、もしくはゲームの世界故か。

『私は結構、美に関しては煩いんだぜ？ マスター』

「……美に拘るぐらいなら兜も付けて欲しかったけどな」

『兜は私のものだから無理だ！』

本当に意味が分からない。

アナが俺のパーソナルから生まれてきたと思うと少し悲しくなってくる。

だが、アテナという女神は美と戦略をつかさどる守護神と聞いたことがある。

そしてこの全身鎧がアテナの持っていたとされるアイギスをモチーフとされているとすると合点がいく。

重さに関してはステータス補正におけるSTRが高いのかもしれない。

しかし今はそれらのすべてはどうでもいい事だ。

「……まあ、こいつらを倒せれば問題ないか」

背後にいるティアンの子供がモンスターに殺されたら俺の負け。ティアンの子供を守りつつ、モンスターを倒しければ俺の勝ち。明らかに敵の方が有利な条件だ。

『それでも私たちが勝つけどな!!』

「……いいから集中しろ」

勝負は一瞬。

嘆くも笑うもその後だ。

言葉を皮切りに感覚が鋭く研ぎ澄まされていく。

いつでも敵の首をとれるように指先まで力を込める。

お互いに睨み合い、動けない……というよりも動かない。

敵の狙いは後ろの子供で、俺はそれを通さんとしてるからだ。

『もう！ 分かったからさっさと片付けろよ、マスター!!』

なんか疲れてきたんだけど!!』

「……だからうっさいって!!」

叫ぶと同時に四肢に力をこめる。

下向きに構えていた槍先が跳ね上がり、敵の首へしなりながら突きあがる。

それに対して「テイルウルフ」の行動は遅い。

まるでコマ送りの様にワンテンポ遅れて動き出す……がやはり遅すぎた。

跳ね上がった槍は「テイルウルフ」の抵抗も許さず、その首を跳ね飛ばす。

『ツ!! マスター!!』

「わかってる!」

不意打ちまがいの一撃で「テイルウルフ」を仕留めたが、それはたった一体だ。

すでに残りの二体は俺の横を抜け走り出している。

だが、AGIは俺の方が高い。

今なら追いついてもう一体を倒すこともできる。しかしその場合は子供は諦めなければならぬ。

それでは俺の負けだ。

そうなればとれる行動は一つだけに絞られる。

「くそっ!!」

子供の元へと全力で駆け、体で子供を守るように覆う。

これが最善策。

唯一、ティアンの子供を守ることが出来る方法だ。

そしてこの方法は正しかったのだらう。

ほぼ同時に体の二か所に衝撃が走る、何らかの攻撃を受けたのだらう。

HPはほぼ全快の状態とは言え、そう何度も攻撃は食らえない。

俺は残りのHPを確かめようと、視界の端に目をやり。

「……どういうことだ？」

全くと言っていいほど減っていないHPゲージに目を見開いた。確かに少しづつはダメージは食らっているようだが雀の涙のような値だ。

『へへえ！ 驚いたか、マスター!!』

これこそ私の保有スキル、《不壊なる護鎧》だ!!』

「……それより効果を言え」

今でもがりがりと攻撃を受けていて少しづつだがHPが減っている。あんまりこの馬鹿にかまう時間はないのだ。

『マスターはせつかちだなあ。』

《不壊なる護鎧》はパッシブスキル。

効果は『鎧の部分に受けたダメージを10%減少させ、減少させたダメージ分だけ好きなステータスに上乘せする』

そして『鎧を着ている個所への傷痕系の状態異常は無効化する』っていうのもあるぞ!』

「……それなら受けたダメージ全部STRに上乘せだ」

言うが早いか振り向きながら、襲ってくる【テイルウルフ】に拳を叩き込む。

俺のSTRはたいしたものではない。

だが、【テイルウルフ】の攻撃でそれなりには上がっていたようだ。

二体共、鳴き声をあげながら地面の上を跳ねる。

そしてそんな隙を逃すはずもなく、槍で倒しきった。

「お疲れだな、マスター」

人間形態に戻りながら笑うアナ。

そんなアナを一瞥し、テイアンの子供を抱えて歩き出す。初めての戦闘で疲れすぎて喋るのがめんどうなのだ。

ただ、これだけは言っておく。

「……俺のくエンブリオ>、使わずれえ」

「なっ！」

「あ、あとその頭に着けてる兜外しとけ。

変に目出っし」

「これは、私のアイデンティティーだ！」

外して欲しければ髪止めを買ってくれ……じゃなくてその前だ
！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎ出すアナをほっておき歩き出す。

アナの声は煩いが、なぜだか気分は悪くはない。

ゆっくりとアルテアを目指し歩き出すのだった。

第3話

□王都アルテア 「槍士」グレン

王都アルテアに無事ティアンの子供を送り届けた俺たちはレストランで食事をしていた。

もちろん『天下三ツ星亭』何ていう高級店ではない。お財布に優しい庶民的なレストランだ。

〈Infinite Dendrogram〉内では初めての食事。現実と変わらず味もするし香りもする。

ファンタジーの世界ならではの料理もあつて食べるのが楽しい……のだが。

「……そんなに食べて平気なのか、アナ？」

「平気に決まってるんだろ。」

「って言うか、こんな美味しいものを食わずにいられるか」

目の前で美味しそうに食事するアナに尋ねる。

その理由はアナの食事にある。

「そんなに食べて大丈夫なのか」とは聞いたが別にアナが大食いなわけでは無い。

食べているものに問題があるのだ。

「これは……うめえ！」

美味しそうに食べるアナの手元には、ぐつぐつと煮えたぎっている真っ赤な麻婆豆腐。

それだけではない、食べるすべての料理が真っ赤で辛い物ばかりだ。

見ているこっちが汗をかきである。

それに変に目立つ。

〈Infinite Dendrogram〉ではそうでもないが、アナは一般的に美人の部類に入る。

そんなアナが激辛の料理を美味そうに食べる。加えて男言葉だ。今でも他の〈マスター〉が物珍しそうにこちらを見ている。

「それで、これから……どう、するんだマスター？」

「……食ってから話せよ、待っててやるから」

その言葉にアナはガツガツと料理を食べ始める。だが、これからの事は大切だ。

「……とりあえず【槍士】カンストまでどつかでレベル上げするか」

「………んぐ。その後は？」

「……そうだな、俺のリア友でもPKしに行くかな」

「……流石の私もドン引きだぜ、マスター」

もちろん冗談だ。

だがいつかは他の国を見て回るついでに会いに行きたい。

初めは、ドライブ皇国なんかが良いかもしれない。

「……まあ、適当に決闘ランカーでも目指すか」

「いいな、決闘！ 正々堂々戦えるしな！」

いまいちアナの思考はよくわからない。

〈エンブリオ〉の特性としては別に対一でも一対多でも関係は無さそうだが。

しかし今はとりあえず『槍士ギルド』でジョブクエストを受けながらレベル上げだ。

ジョブクエストで得られるジョブスキルもあるからだ。

基本的なスキルはある程度取っておきたい。

俺は食べ終わったアナを後目に会計のためカウンターへと向かう。手持ちはへ Infinite Dendrogram を初めて1リルも使っていないので払えるはずだ。

「お会計は4850リルになります」

「……おっふ」

今日は夜までクエスト&レベル上げだ！

◇

俺とアナが訪れたのはへサウダ山道 だった。

メイン武器である槍はへノズの森林 ではやはり扱づらいからだ。ここでは振るうのに邪魔になるような木々は無いし、モンスターに気づくことが出来ずに不意打ちを食らう心配もない。

《危険察知》スキルを持たない俺でも安心して戦いに集中できる。

『はずだったって感じか？ マスター』

「……心読んでんじゃねーよ。っと！」

気合と共に槍を突き込む。

突き出された槍は凄まじいスピードで敵モンスターを貫通し、ドロップアイテムへと変える。

【護鎧乙女 アテナ】のステータス補正によって俺はAGIが大きく上昇している。

【槍士】がAGIの伸びが高めなこともあるのだろう。そのおかげかレベル上げも周りの同じ初心者へマスター よりもかなり早く上げられている。

実際に【槍士】のレベルは18まで上がり、《瞬間装備》を会得した。

【槍士】のパッシブスキルである《持久力上昇》と《筋力上昇》のスキルレベルの上昇、アクティブスキルである《チャージスパイク》も

会得している。

レベル上げとしては順調と言える、問題があるとすれば……

「……くっそ硬い！」

『口が悪いぜ、マスター！』

敵モンスターに岩石系モンスターが含まれている点である。

山道という事もあって【ゴブリン】系以外にも禿鷹のような【リトルロックバード】、ゴーレムの【ストーンゴーレム】やトカゲの【ロツクリザード】なんかが多い。

初心者にはきつい相手だ。

幸いだったのは動きが遅い事、そして体全体が岩なんかで覆われていない事だろう。

「フツ!!」

掛け声と共に【ストーンゴーレム】の岩の鎧の隙間を狙い穿つ。

AGIの差で槍は狙い通りその体を削りえぐる。

だが、それだけでは倒れない。

『GUOOOOO!!』

〈Infinite Dendrogram〉のゴーレムも例に漏れずHPが多いのだ。

STRが高くない俺では一撃では倒せない。

槍を突きさした形で止まる俺に向かい、ゴーレムの腕が唸りを上げる。

例え、HPとENDも補正があると言えども食らえば【テイルルーフ】のような微ダメージでは済まないだろう。

だから、やられる前にやる。

「……っらあ！」

槍を離し、動きの遅い「ストーンゴーレム」に向け拳を叩き込む。四、五発叩き込むと「ストーンゴーレム」はドロップアイテムを残り消えていった。

本来なら反射ダメージを食らうところだが、「護鎧乙女 アテナ」は鎧型〈エンブリオ〉。

俺が負うダメージは0である。

『それ、逆に乙女である私で殴りかかっているんだぞ？ わかっているか？』

「……まあ、これが一番効率いいからな」

『そういう問題じゃねえ！ 私が嫌なんだ！』

アナはそう言うが箆手自体には傷一つ付いていない。これもアナの〈エンブリオ〉としての性質なのだろう。本当に硬い奴だ。

『それは私が硬い女だって言っているのか！』

「……間違ってはいないな」

「否定しろよ、マスター！」

そんな事言わないでもわかっているだろうに。

お互いに軽口をたたきながらモンスターを次々と倒していく。加えてこのモンスターはドロップアイテムがそれなりの値で売れる。金不足な俺たちにはびったりなのだ。

「……っと、またレベルが上がったな」

【ゴブリン】を倒すと同時にレベル上昇のアナウンスが脳内に響く。一つ目の下級職だからか、初心者向け狩場でもかなりレベルが上が

りやすい。

だが、それでも限界があるのだろう。
流石に少しレベルが上がりずらくなってきたように思える。
そろそろ狩場を変えるべきかもしれない。

『マスター、一度アルテアに戻らないか？』

私なんか疲れてきたんだけど』

「……お前の事は知らないけど……そうだな。

ジヨブクエストの報告もしなくちゃならないし」

それに新しい槍も欲しい。

新しい狩場へと向かう為にももう少し攻撃力の高い槍が必要なのだ。

初心者装備は初心者用狩場までという事なのだろう。

【ゴブリン】が落としたドロップアイテムを拾い上げ、アイテムボックスにしまい込む。

その瞬間だった。

『おい、マスター』

「……ああ、なんか来てるな」

聞こえてきたのは何かが駆ける足音。

何かが迫りくるような足音が地鳴りと共に聞こえてくる。

揺れからして〈サウダ山道〉の王都アルテアとは逆方向、確か〝決闘都市〟ギデオンへと続く道のはずだ。

道の向こうに薄っすらと砂埃が見える。

「……あれは……人か？」

『ああ、正確にはモンスターに追われている人だな』

馬に乗ってこちらへ逃げる人、そしてそれを追いかける形のモンス

ターの群れだ。

モンスターの数は10を超えている。

『助けるか？ マスター』

「……まあ、どちらにしてもこっちに来るしな」

それに助けたらもしかしてお礼……もとい金が貰えるかもしれない。

迫りくるモンスターの群れに向かい槍を構える。

すでに馬に乗って逃げている人……おそらくティアンの商人はすぐ近くまで来ている。

しかし馬もどこかに傷を負っているのか満身創痍だ。

このままではモンスターに追いつかれるかここまで逃げ切られるか分からない。

ティアンの商人がやられては、もらえる物も減ってしまう。

「……しようがない」

すでにアナは鎧形態へと変形済みだ。

俺は足に力を込めながら前傾姿勢をとり、

「えっ？」

逃げながら驚きの声を上げるティアンの横を駆け抜け、後ろへと続くモンスターを蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたモンスターは文字通り吹き飛び、光の粒へと変わっていく。

だが、それだけでは止まらない。

蹴り飛ばすと同時に一番近くのモンスターに槍を振るい、首を飛ばす。

『GARURURUU!!』

いきなり仲間が殺されそのモンスターは唸りを上げながら動きを止めた。

姿としては俺が初めて戦った【ティールウルフ】に近い。

だがどこか【ティールウルフ】よりも雰囲気が違う、ただ言えることは【ティールウルフ】よりも確実に強いという事だろう。

跳びかかってくる【ティールウルフ】もどきを蹴り飛ばしながら別方向からの攻撃を槍で防ぐ。

どうやら連携も【ティールウルフ】よりもはるかに高いらしい。

「そ、そいつは【アースウルフ】、【ティールウルフ】の進化モンスターだ気を付けろ！」

背後から先ほど逃げていた商人の声が聞こえてくる。

『逃げてなかったのかよ』

「……お礼貰わなきゃならないからな」

しかし【アースウルフ】か。

おそらく今まで戦ってきた中では一番の強さだろう。レベル的には10台後半辺りのはずだ。

【ティールウルフ】よりも強く、【ストーンゴーレム】に近い防御力。

「……だが、勝てない相手じゃねえな」

『当たり前だぜ』

跳びかかってくる【アースウルフ】の噛みつきをわざと籠手で受け、下を這うように襲い掛かろうとする【アースウルフ】に叩きつける。

とどめに二体まとめて槍で突きす。

うん、強いがそれほどではない。

『涎は後で拭いてくれよ?!』

アナの要求を聞き流しながら残りの「アースウルフ」を倒し続ける。かわしきれない攻撃を鎧で弾き、跳びかかってきたのを槍で突き殺し、威嚇代わりに蹴りを叩き込む。

残りの「アースウルフ」の数に比例するように隙がでる連携攻撃。その隙を見逃さず、槍を振るう。

槍が通じる分「ストーンゴレム」よりも時間が掛からない。

五分後には10体以上いた「アースウルフ」の姿はなく、ドロップアイテムだけが無感動に散らばっていた。

「……レベルが2も上がったし美味しい相手だな」

『今のマスターと私ならまだ余裕があるな!』

実際にあと10体は増えてもギリギリ勝てるだろう。

「あ、あの! 助けて下さりありがとうございます!」

後ろを振り向くとぼろぼろの姿のティアンが頭を下げていた。

先ほど助けたティアンの商人だ。

「た、助けてください!」

「……は? 何言ってるんだこいつ」

『マスター、口に出てるぞ』

ミスった。

てつきりお礼でも貰えるのだと思っていたので、予想外の言葉に思っていた言葉が口から出てしまったようだ。

「実は向こうにまだ私の仲間と積み荷が残されていて……」。

【アースウルフ】の群れに襲われているんです」

商人は【アースウルフ】に追われてきた方向、ギデオンへと続く道を指しながら言う。

その焦り様から言っている事は本当だろう。

今この瞬間も彼の仲間【アースウルフ】に群れに襲われている。

「お願いです！ 私の仲間を、妻そして息子を助けてください！」

【クエスト【救出しろ——ギルバード商行団 難易度・六】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

商人は顔をくしゃくしゃに歪めながら叫ぶように助けを乞う。

同時にクエスト発生アナウンスが脳内に響く。

おそらくイベントクエストなのだろうが、勝手に受ける形になってしまった。

『どうするんだ、マスター？』

「……まあ、いいんじゃない？」

俺たちでも【アースウルフ】は倒せるみたいだし」

今の俺たちでも【アースウルフ】は十分相手どることはできる。

正直、守りながらだとかどうかは分からないがクエストを受けてしまった今では大した問題ではないだろう。

そうなれば、できるだけ早く助けに行かなければならない。

「……おい、正確な場所を教えろ」

「は、はい！ 場所はこの山道を道なりに進んだ途中です！」

商人の言葉を聞くが早いか走り出す。

ただ、純粹にクエストの為という理由だけで。

その先に待ち構える敵も知らずに……。

第4話

□〈ヘサウダ山道〉【槍士】グレン

イベントクエストが始まってから約10分。

俺は全力で山道を駆けていた。

数多く存在するクエストの中のイベントクエストは特別である。ほぼすべてのクエストに達成までの制限時間が存在するがイベントクエストはそれらがいまいなものが多い。

特に今回のイベントクエスト、【救出しろ——ギルバード商行団難易度：六】。

現在進行形で進んでいるこのクエストは急がなければ失敗になるたぐいのイベントクエストだった。

『マスター、どうやら見えてきたようだぜ?』

走っている俺の頭にアナの声が響く。

おそらくあそこで今でもティアンの商人たちが命がけで戦っている。

俺はラストスパートとばかりに速度を上げた。

すると山の起伏で見えなかったモンスターの群れが見えてきた……が。

「……なんだ、これは」

見えてきたのは【アースウルフ】などのモンスターに囲まれながら必死に戦うティアンの姿……などではない。

そこには人の形をしたものはなく、人だった赤い血肉が広がっていた。

聞こえてきたのは助けを求めるティアンの声……などではない。

聞こえてきたのは喜びに嗤うモンスターの遠吠えだった。
生きていたティアンは一人としていない。

生きているのは方を超える魔獣系モンスター、そして崖の上で吠える一体の大きな黒狼だった。

あまりに予想していなかった光景に脳がフリーズする。

だがそれも仕方がない事と言える、へInfinite Dendrogramの世界に降り立って一日も経っておらず人の死体など一度も見ることが無いのだから。

『おい、マスター。気をしっかり持て。』

敵から目を逸らすな』

「……ああ」

『……おい、本当に聞いているのか?』

アナの言葉がうまく頭に入っていない。

脳に靄が掛かっているようだ。

モンスターにもいまいち集中できず、ティアンの亡骸から目が離れない。

「……わかってる、わかってるんだ。だが……うっ!」

受け入れられない。

これはへInfinite Dendrogramだ、ゲームだ、そしてあれはただのNPCだ。そう頭で認識しているはずなのに体が、脳が反応する。

腹の奥から苦々しいものがこみ上げ、足に力が入らない。

これが死、この世界における『死』だと。

『マスター……』

「……正直分かってたよ。俺がこの世界をゲームだと思っ
ていないって事は。」

ティアンは俺たちへマスター」の様には生き返らない、だから俺はティアンが助けを求めているのなら全力で助けようとする」

『分かっているよ。そんなマスターから生まれてきたのが私だ。』

助けたいと、守りたいと思ったからこそ生まれてきたのが『アナ』だけ?』

アナはぶつきらぼうに、慰めるように優しく答える。

「……だからこそ分からねえ。

守るべき対象がいなくなってしまった俺は、守り切れなかった俺はどうすればいいんだ」

『……』

アナは答えない。

沈黙が支配する空間のなかで俺は呆然と眼前に広がる光景を見つめていた。

するといつからか数体のモンスターが俺の方を向いていた。

魔獣系モンスターだからだろうか、鼻が利くのかもしれない。

唸り声をあげながら百メートルほど離れている俺に向かってかけてくる。

『……マスター、今だから言うぜ。』

今の私とマスターは半端ものだ。『メイデン』としても、一人のへマスター」としてもだ』

駆けてきたモンスターは「アースウルフ」だけではない、他にもいくつかの種類の狼型モンスターが混じってる。

力が入らない体を動かし攻撃するが一撃も当たらない。

あつという間に体に何体ものモンスターが噛みつく。

『私はマスターのへエンブリオ」だ。マスターの望むままに従う。』

戦いを望むなら私があるの願いをかなえる可能性になる。

逃げ出すというなら私は……正直嫌だが付き合うぜ?』

「……アナはずるいな」

じりじりと減っていくHPを見ながら呟く。

アナは言っているのだろう。

「逃げるのならこのままデスペナルティになってしまえばいい。

そしてすべてを忘れてしまえばいい。

再びセーブポイントから始めればいいのだ」と。

「いっー」

腕に噛みついていた狼型モンスターの牙から炎が噴き出した。

他にも特殊な能力を持つモンスターがいたのだろう、状態異常として【毒】がついている。

レベルが上がり2000に届きそうだったHPがガリガリと削れていく。

『そろそろ選択のときだぜ? マスター。』

ここが分岐点だ。

逃げるか、それとも戦うか。今、ここで決めろ。

……あ、そうだ。ついでに私はガツガツしたほうが好きだぜ、マスター?』

「……お前の好き嫌いはどうでもいいが……まあ、礼を言っておくよ。

だけどお前も俺がどっちを選ぶかなんてわかっているだろ?」

返事は無い、だが身に纏う鎧が煌めいた気がした。

ああ、そうだ。取るべき答えは、行動は最初から一つだった。

俺は自嘲的に静かに笑う。

そしてモンスター共が噛みつき、重くなった腕で槍を握った瞬間

だった。

「!!」

俺でもモンスターでもない泣き声が山道に響く。

声を出したただけのような言葉として成り立たない泣き声、だがそれは聞き覚えのある泣き声だ。

何かをねだるようなやけに響く声……そう、生まれて間もない赤ん坊の泣き声だ。

そしてそれは、半壊した荷馬車から聞こえてくる。

『……生き残り!!』

時が止まったかのような空白を埋めるようにすべてが動き出す。

崖上の黒狼は命令するかのように吠え、周りの狼型モンスターが一斉に半壊した荷馬車へと向けて走る。

その距離は5メートルもない。

真っ先に走り出したモンスターが鼻をひくつかせながら、馬車のか所を目指す。

それは小さな木箱。

モンスターはその木箱に向けを鋭い爪を振り下ろし、中に居た赤ん坊を露見させた。

そして涎を垂れ流しながら、その柔らかな体に刃を突きたてようと大きな牙を開き……

『GARUU……?』

その鋭い牙は何も噛みしめることなく地に落ちた。

首というおまけと共に。

『おいおい、マスター！ 無茶するなああ、おい！』

「……なんでお前は嬉しそうなんだよ」

俺は無くなつた左腕にHP回復ポーションを掛けながら返事を返す。

【左腕欠損】による遅延ダメージが続くものの、HP自体は最大まで回復する。

もしかしたら欠損を治せるポーションもあるのかもしれないが、俺の持つHP回復ポーションにはそれほどの効力は無い様だ。

『だつてよお！ 全身装備を解除して一瞬隙を作るなんて頭いかれてるぜ。』

そのうえ、途中で捕まった左腕を自分から切り飛ばすとか……狂人だな！

絶対後先考えてねえな！』

「……だからなんでお前は嬉しそうなんだ」

飛びついてきたモンスターを槍で突きさし光の粒子にかえる。

しかし敵は万を超えるモンスターの群れだ、俺を荷馬車ごと囲みながらじりじりと距離を詰めてくる。

正直手がない。

決意を胸に戦うことを決心したはいいが万策尽きた、このままでは普通に死ぬ。

「……よし、赤ん坊連れて逃げるか」

『さつきまでの決意は何処にやったんだよ、マスター……』

「……んなもんは左腕ごとモンスター共にくれてやったよ」

『マスター……』

まあ私も正直賛成だ、だけどあいつは逃がしてくれないようだけぜ？』

モンスター共の奥で佇む大きな黒狼を見る。

確かにその真つ赤な目には、『絶対に逃がさない』といった意識のよ
うなものが見てとれた。

黒狼は明らかに他のモンスターとは格が違う。

その気なれば今すぐにでも俺をデスペナルティに追い込めるので
ないかと思うほどだ。

おそらくAGIも奴の方が上、逃げることはできないだろう。

「……そもそもあいつは何だ？」

亜竜級モンスターってやつか？」

『マスターって意外と抜けているのか？』

槍士ギルドで見ただろう、あれは賞金が掛かっているモン
スター。

〈UBM〉【群狼王 ロボータ】だろ』

「……馬鹿、そう言うことは早く言え」

まさかの〈UBM〉。

〈Infinite Dendrogram〉におけるボスモン
スターだ。

同じモンスターは二体としておらず、完全な唯一無二のモン
スター。加えて強力なステータスや特異の固有スキルを持つ。

出会う事自体が極稀であり、五段階等級の一番下である『逸話級』^{エピソード}で
も上級職とへ上級エンブリオと同格と言われている。

そんなモンスターが万を超えるモンスターを引き連れて目の前に
居る。

「……絶望的だな」

万を超えるモンスターだけでも八割は死ぬ。

しかし〈UBM〉の出現によって死ぬ確率が九割九分まで引きあ

がった。

いや、【群狼王 ロボータ】というぐらいだ。

このモンスターを引き連れているボスが奴なのだろう。

『安心しろよ、マスター。』

運がいい事につき私は進化したみたいだぜ?』

全身鎧形態だったからだろうか、全くと言っていいほど気が着けなかった。

しかしこれで生存率が多少は上がるかもしれない。

「……それで?」

『ん?』

「……なんか新しいスキルでも出てきたのかって聞いてんだよ」

『ああ、『不壊の護鎧』のダメージ軽減が20%になったぞ。』

あとは……AGI補正なんか上がったのと鎧として硬くなっただな』

「……くそ、つかえねえな! つと」

飛び出してくるモンスターを蹴り飛ばし、槍で止めを刺す。

進化と言ってもそれほど大きく変わるわけでは無いようだ。孵化したばかりなので当たり前と言えば当たり前なのだろうが。

しかしこれではよくて生存率が九割八分になった程度だ。

しかしそれでもやらねばならないのだろう。

奇跡の勝利と言う奴を。

「……左腕は無く、武器は砕けそう。HP回復ポーションは……馬車にありそうだが、これで赤ん坊を守り抜くのか。

糞ゲーだな」

『それでもやるんだろ?』

「……決心してしまっただからな」

始めよう、己の意志を貫き通すための戦いを。
守るための戦いを。

今、降り立ったばかりの初心者ビギナーへマスターと孵化して間もないへエ
ンブリオによる奇跡を起こす戦いが始まる。

第5話

□へサウダ山道◇ 【槍士】 グレン

聞こえてくるのは怒りに狂うモンスターの遠吠え。

鳴り響くのは槍によって奏でられた槍戟そうげきの数々。

推定、逸話級へU B M◇ 【群狼王】 ロボータ。

そして【群狼王】ロボータが率いる一万に近い狼型の魔獣系モンスターの群れ。

一対一万の戦闘が始まってからすでに五分の時が過ぎていた。

五分……秒計算における300秒。

そしてグレンは五体満足、いや、左腕を失いながら四体満足で今なお戦い続けていた。

それはまさしく『奇跡』と呼ぶにふさわしいものだった。

誰が、始めたばかりの下級職のマスターが耐えきれると予想できただろう。

——Type:キャツスルの守ることに長けたへエンブリオ◇なら可能だろうか？

いや、何千と繰り返された攻撃にその堅硬な壁を突破されるだろう。

——Type:テリトリーの範囲攻撃に特化したへエンブリオ◇なら可能だろうか？

いや、最大の敵である【群狼王】ロボータを倒しきれずにやられてしまうだろう。

これは彼だからできた事。

まさしく【槍士】グレンと【護鎧乙女】アテナによる命がけの戦闘と、両の指を超える奇跡を起こし続けた先に作り出した奇跡だった。

た。

今はその中でも三つを上げよう。

一つは彼が、グレンが槍の扱いにおいて天才と呼べる才能を持っていた事。

未熟だった槍の扱いが、生と死の瀬戸際の戦場で研ぎ澄まされていったのだ。

槍の振るい方、足の運び。

SPの消費が死につながるこの戦闘。

必然的にスキルによる攻撃を行うこともなく、その槍術は高みへ成長し続けた。

それこそ熟練の【槍士】、【剛槍士】のティアンと並び、超えるほどに。

もし仮に【槍神】^{ザ・ランス}のジョブが空いていたならば、取得可能を告げるアナウンスが流れただろうと言えるほどに。

そして二つ目は【護鎧乙女 アテナ】としての特性。

全身鎧型エンブリオである【護鎧乙女 アテナ】。

第二形態へと至り、その効力を上げた《不壊なる護鎧》はこの場において大きな力をもたらした。

一万を超えたモンスターへの攻撃。

必然的に被弾は増え続けるもののモンスターの巧みな連携、そして後ろの赤ん坊を守るため動けないグラン。

二つの結果が合わさり、一時的にグレンのステータスは『超級職』に届くステータスを手に入れていたのだ。

全身鎧として堅硬なアナは砕けることなく、その力を最大限発揮した。

そして三つ目、守ることに適した環境だった事だ。

守るべき対象である赤ん坊の背後は、砕けた荷馬車とアイテムボックスが破壊されその場にばらまかれた家具などによるバリケードとなっていた。

加えて、HP回復ポーションなどが無事に多く残っていたことも大きい。

しかし、グレンが耐え切ったことに一番大きく貢献したのはそれではない。

それは、【群狼王 ロボータ】が一切手を出してこなかった事。

〈UBM〉として用いる特異なスキルを使わず、驚異的なステータスで攻撃してこなかった事がグランを未だデスペナルティにさせない大きな理由の一つだった。

——たくさんの軌跡を起こし、幾多の死線を超えた。

それを成したグレンと【護鎧乙女 アテナ】。

しかし奇跡では超えられないものがある。

根性、気合では変えられないものがある。

それは……

『ツツ！ マスター！』

それは、アイテムとしての耐久値。

アナの呼びかけとモンスターの唸り声にかき消された破壊音。

だがそのアイテムの破壊は……初期装備である槍の消失は、右手から消えた重量が何よりはつきりと物語っていた。

「……詰んだな」

『今さら諦めんな!』

「……冗談だ。加算ステータスをSTRに切り替えろっ!」と

折れた槍の柄を迫りくるモンスターに投げつけ、拳を叩き込む。

槍が消え、チャンスと突っ込んできたモンスターに蹴る。

《不壊なる護鎧》によって上昇していたステータスによってモンスターは死なないものの一撃で戦闘不可能になっていく。

攻撃という面では籠手や脚甲による攻撃の方がはるかに高い。

人によれば有利になったと思うかもしれない。しかし今のグレンの状況は紛れもないピンチだった。

「……糞っ!」

グレンは槍を用いた戦闘において天才だ。

これは紛れもない事実である。

では、戦闘においては?

『マスター!』

叫んだのはアナ、同時に視線を右へと向ける。

目に映ったのは凄まじいスピードで走り込んでくる一体のモンスター。

真っ黒な毛並みに一際大きな体の巨狼。

「……どこで来るか!」

飛び込んできたのは他でもないロボータ。

奴は戦いに参戦しなかったのではない、ただひたすらグレンに隙が

出来る時をうかがっていたのだ。

そして今、槍を用いた戦闘から戦い慣れていない素手による戦闘に切り替えきれなかったグレンの隙を逃さなかった。

(速い!!)

超級職並みのステータスのグレン。特にAGIに関しては二万を超えている。

しかしそれよりも僅かに速い。

下級モンスターである「アースウルフ」などとの戦闘に感覚が慣れ、右腕を殴り切った態勢。

蹴りも放てる態勢ではない。

(――間に合わない)

次の瞬間には後ろの赤ん坊は殺されているかもしれない。

そう、迎撃しなければ……。

そう考えると同時に叫んでいた。

「……アナ！ やれ！」

無意識。

例え、思考を共有できるメイデンとはいえ、無意識では何も伝わらない。

しかし、アナはそれを成した。

『無茶言うぜ……マスター!!』

動き出す右足。

蹴れない体勢、それに関係なく右足が勝手に蹴りを放つ。

『GRRU?』

〈UBM〉であるロボータも予想外の攻撃に目を見開きながらその強靱な爪を振り下ろす。

一方はAGI二万を超え、下級モンスターを一撃で戦闘不能に追い込む蹴り。

一方は〈UBM〉としての高いステータスで振るわれた鋭い爪撃。互い一閃。

すさまじい勢いでぶつかり合った反動に、互いに宙に体が舞う。

幸いだったのは吹き飛んだ先が赤ん坊のいる馬車では無かったことだろう。

しかし、互いに一撃の反動は大きく表れていた。

「……おい、やっぱり、糞鎧じゃ、ねえか。防具の意味……しっぺんのか、アナ」

『はあ!? 何言ってるんだマスター! むしろあそこで意図をくみ取った私を褒めて欲しいね!』

激しい痛みを訴える背中。

凄まじい衝撃でうまく動作しない肺を動かしながら文句を言う。

そして腰のアイテムボックスからHP回復ポーションを取り出し、膝半ばから千切れた右足に振りかけた。

全身鎧型へエンブリオであるアナだから出来た、無理やり体を操った蹴り。

それは見事と言えるだろう。

しかしロボータとの相打ちによる代償は大きかった。

グレンは右足を半ば失い、ロボータはその自慢である鋭い爪がへし折れたのだ。

しかし代償としてはグレンの方が大きいと言える。

何しろ「左腕欠損」と「右足欠損」による継続ダメージ。なによりこれでは赤ん坊を守り切れない。

ある意味、勝敗は決したと言ってよい。

このままではまともに戦えず、すぐにデスペナルティになり赤ん坊も殺される。

結果は火を見るよりも明らかだった。

だが、グレンは結果的に再び奇跡を起こした。
それこそ無意識、偶然の産物と言えるだろう奇跡。

『【群狼王 ロボータ】の自慢である爪をへし折った』のだ。

ロボータは一匹のモンスターであり、狼の王であった。
だから……

『A O O O O O O O O O O O N!!』

山道に響く大きな遠吠えと共に、グレンを狙った戦闘が始まった。
しかしそれだけではない。

あえて、もう一度言わねばならない——〈U B M〉は特異なスキル
を持つ、と。

【群狼王 ロボータ】は主に三つの能力を持つ。

その一つは『群狼強化』

その名のとおり、配下であるモンスターを強化する能力。

そして『群狼強化』は率いる配下が多いほど強化される、それは配
下のモンスター達だけで亜竜級モンスターなら簡単に狩れるほどに。

「……強くなってるのか」

配下のモンスターが次々と襲い掛かる。

片足を失い、敵は【群狼王 ロボータ】によって強化させている。

その差は顕著に表れた。

籠手で防ぎきれていた牙が腕まで達し、鎧で遮断出来ていた【フレ
イムウルフ】の火魔法が鎧下の体を焼く。

その強化は生きているモンスターの値によって決まる。

グレンがとどめを刺しきれずに戦闘不能に追い込んだ四千を超える
モンスターの強化分も。

避ける事に集中しながら必死に凌ぐ。

迷わず地面を転がり、片足で地面を蹴る。少しでも荷馬車から距離をとるように。

だがその考えも儂く砕け散った。

避けた先に突如現れた大きな影、そう【群狼王 ロボータ】だ。

本来ならば目で追えていたはずのその姿。

もちろんグレンも鎧形態のアナでさえも注意を払っていた。

しかし、その動きに気付けなかった。

『狼王権限』

その能力は、配下の数×全ステータス+1。

これこそ【群狼王 ロボータ】たる由縁の能力。

ロボータ単体ならばその脅威は逸話級〈UBM〉に属するだろう。

しかしあくまで単体ならば、群れを率いるその力は伝説級にも届きうる。

そして一万を超える群れを率いるロボータの力はゆうに逸話級を超えていた。

これが〈UBM〉。

これが王。

これが【群狼王 ロボータ】

群にして個、個にして群。ロボータは紛れもなく〈UBM〉だった。

「ぐっ！」

『マスター！』

ただ腕を振っただけ。

本来なら大ダメージを受けても防ぎきれぬ攻撃。

しかし勢いを殺し、踏ん張る足はすでに無い。

簡単に宙を飛び、赤ん坊がいる壊れた荷馬車に叩きつけられる。

死ななかつたのは運がいいだけ。それでもダメージを20%減少

させてギリギリだ。

「……糞、ずりいなあ」

泣きたくなる。

元から倒しきれるとは考えてはいなかった。

ただ、王都アルテアからの増援が届くであろう時間を稼ぐ。それだけだった。

しかしそれさままならない。

俺に力が足りないからだ。

だから今、自分は何もできずに倒れている。

「……ああ、ほんとに悔しい。

まさか暇つぶしに始めたゲームでこんな思いをすることになるとはな

『……マスター?』

思わずこぼれた愚痴に自嘲的に笑う。

「……でも決めちゃったから、決心しちやっただからなあ。

逃げないって。守り切るって」

動く右手で取り出したポジションを飲み干す。

左手もない、右足もない、加えて言うなら武器もない。だがやろう。

動く体があるのなら、諦めきれない熱が心にの追っているのなら。

「……いくぞ、アナ」

『どうするつもりだ?』

「……ハッ！ それこそ愚問だぜ」

死ぬまで、増援が来るまで守り抜く……なんてことは言わない。
今からは勝ちに行く。
これからは守るなど一切考えない。
欲しいのは一つ、勝利の喜び。
狙うは一つ、奴の首。

「……お前もガツガツしたほうが好みだろ？」

『……分かってんじゃない！』

一人、今度は獰猛に笑う。

回復ポーションは飲み干した、おかげでHPは完全に回復している。
る。

状態異常のダメージもアナの〈エンブリオ〉のスキルの影響を多少は受けているのか微々たるものだ。

「……後は武器が欲しいな」

戦うのに素手というのは締まらない。

この際、剣でもなんでも構わない。崩れた荷馬車の中を見渡す。
そして見つけたのは怪しく揺らめく一本の十字槍。

「……連がいいな」

『いや、ちよつと待て。色々おかしいだろ』

アナが何か言っているが使えるのなら関係ない。

確かに槍の柄部分が何かの骨のような形かつ真っ赤で、矛先がなんだか脈うっている気がしないでもないが問題ない。

何より槍はこの一本しかないのだから。

『いや、よく見ろよ！ 赤というよりどす黒いぞ！

それに普通の武器は脈打たない！』

「…………ん？ 【出血】と【死呪宣告】、あと【装備変更不可】？

こんな状態異常受けたっけ？」

『ば、ばかあああああ！』

問題ない。

呪いの武器だろうが使えるのならば。

新しい十字槍を支えに立ち上がる。

『そんなの使って死んでも知らねえぞ！』

「…………人を呪わば穴二つつてな」

『…………もしかしてそれって私も道ずれってことか!?!』

「…………別に二人だけじゃねえよ。」

どうせなら一万と一匹も道ずれにすればいいのさ」

赤ん坊から離れるように荷馬車が出る。

そんな俺をモンスターの群れが出迎える。

今度こそいたぶり、殺してやろうと。

『A O O o o o o o o o o O O O N!』

「…………行くぞアナ！ 第二ラウンドだ！」

再びへサウダ山道へに槍戟の音が響き渡り始めるのだった。

第6話

■【群狼王 ロボータ】

彼は生まれながらにして弱者だった。

人間が言うところの「テイルルルフ」、それが彼の種族名だった。自身より弱いモンスターを狩り、狩られる日々。

自身が弱者であることに怒りを覚えたことは無い。ただそれをありのまま受け入れ、生き抜いてきた。

だがそんな日々にも終わりが訪れる。

それは「マスター」の存在。

突然現れた彼らは特異な力をもって、仲間をまるで作業のように殺していく。

同族だった仲間の群れは次々と姿を消していった。

諦めるかのように不死身の化け物に駆られる群れ。

息を潜めて隠れ潜み、生き永らえようとする群れ。

仲間を失い、居場所を失い、泣きながら逃げ出した群れ。

そんな同族の姿を見て、彼が何も思わなかったわけでは無い。むしろそれらは彼に大きな衝撃を与えた。

——なぜ、自分たちは弱者なのか？ と。

生まれてこの方考えもしなかった疑問。

同時に心の底から湧き上がってきたのはマグマのような底なしの怒り。

「マスター」へ向けた怒りではない、自分自身の弱さへの怒りだった。

その怒りを胸に彼は群れの中で唯一不死身の化け物を狩り始めた。

死んでも数日のうちに復活する化け物、それを何度も何度も狩り続ける。

初めに居た仲間は今となっては一匹もいない、生き残ったのは彼だけだった。

唯々、収まらない怒りに突き動かされるように狩りを続ける。彼には才能があつたのだろう。

それに比例するように彼は『進化』を繰り返し、群れはその大きさを増していった。

そしてそれが聞こえてきたのはついこの間。

一際強い不死身の化け物を噛み殺し、『進化』を果たした時だった。

【(〈UBMユニーク・ボス・モンスター〉 認定条件をクリアしたモンスターが発生)】

【(履歴に類似個体なしと確認。〈UBM〉 担当管理AIに通知)】

【(〈UBM〉 担当管理AIより承諾通知)】

【(対象を〈UBM〉に認定)】

【(対象に能力昇華・死後特典化機能を付与)】

【(対象を逸話級——【群狼王 ロボータ】と命名します)】

意味は分からない。

ただその天アナウンスの声が聞こえると同時に夢から冷めたような気がした。振り返ると自身に付き従う数えきれない程の同族たち。そして同時に理解した。

自分はずいに狩る側になつたのだと。



——何故こうなつた。

不思議な天アナウンスの声以降、自身を狩ろうとする不死身の化け物はたくさん増えた。

そしてそのことごとくを振り返りにしてきた。

率いる同族もあれよりはるかに多くなった。
もう自分を倒せるのは同類である、あの大瘴鬼ぐらいであろう。

——それなのに何故だ。なぜ我はここまで追い込まれている？

目の前に立っているのは小さくか弱い不死身の化け物。今まで戦ってきたものの中でも弱い部類に入るであろう。

それなのにそのたった一人に自分が、自身の群れが追い込まれている。

片腕を失い、まともに戦えないはずなのに。

片足が千切れ、まともに立てないはずなのに。

真紅の鎧を纏う男は止まることなく戦い続ける。

その禍々しい槍を振るうたびに仲間の首が飛ぶ。

それを止めようと超音速での牙顎を突き立てるが……

——何故、何故……何故倒れん！

まともに戦えないはずのその体は光の粒になることは無く、槍を振るう。

男は確かに限界だった、すでにまともに立てる体ではなく戦う事も難しい。

だが【群狼王 ロボータ】であった彼は一つ勘違いしていた、男が一人であると。

「……アナ」

『分かってる！』

すでに立つ事も難しいほどボロボロの体、動くたびに骨の軋む音がする。

全体重を支え、動き続ける足はもう感覚さえもないだろう。

だがその体を全身鎧型であるアナが無理やり動かしていた。

本来ならば維持することも難しい態勢、人ではとることさえも難しい動きを無理やり行う。体への負荷は無視した荒業。『傷痕系』状態異常を無視することが出来る「護鎧乙女 アテナ」だからできる荒業だ。

そして片腕ではさばくことのできない攻撃の嵐。

片腕では不可能な「首を刎ねる」という芸当。

その不可能を男の持つ十字槍が可能にした。

銘を【鮮血無槍】

【高位錬金術師】と【大死霊】をジョブに持つティアンに作られた呪われた武器だ。それゆえか【鮮血無槍】は独自の装備スキルを持つていた。

その装備スキルは《狂血無骨》という。

効果は「首または頭部への攻撃に限り、防御力を無視し切り落とし、貫く」

呪われた武器にふさわしいスキルだろう。

無論、それに対する呪いも大きい。

だがそんなことはこの場にいる男にも、【群狼王 ロボータ】にも関係ない。

問題は「槍に関して天才的な才能を持つ」男が【鮮血無槍】を握り、【群狼王 ロボータ】にとってその槍は自身を倒しえるということが重要だった。

何十、何百も槍と尖爪がぶつかり合う。

互いに音速を超えた超音速、どれだけ時間がたったかもよく分から

◇◇◇

□【槍士】 グレン

【〈UBM〉】【群狼王 ロボータ】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【【グレン】がMVPに選出されました】

【【グレン】にMVP特典【黒狼肩甲 ロボータ】を贈与します】

地面に倒れながら〈UBM〉討伐のアナウンスを聞く。

目の前には首から胴体にかけて槍が貫通し、光の粒となっていく

【群狼王 ロボータ】。

その最後の姿を見つめながら立ち上がる。

「……意外と呆気ない最後だったな」

『いやいや〈マスター〉が頭のおかしい事をするからだろ』

アナが呆れたように言うが大したことは何もしていない。

しいて言うなら【群狼王 ロボータ】の切り札が俺に対して相性が悪かったというところだろう。

あの状態の俺に対しての【拘束】はあまり意味を持たないのだ。もとより動かせる箇所など腕と頭ぐらいのものだ。そのほかはアナが無理やり動かしている。

加えて言うなら【脱力】もだろう。

アナに無理やり腕を動かせ、投擲した十字槍。

その効果はおそらく部位的な防衛無視、STRに50%のマイナス補正が掛かって大した意味は持たなかった。

『だからと言って首を噛まれながらなんて頭逝ってるぜ?』

「……まあ相打ちってことだな」

首の付け根から噛みちぎられたように出来た傷。

投擲に全力を注いだ結果だ。

おかげで【出血】が【貧血】へと変化し、凄まじいスピードでHPが減っていく。

だが【死呪宣告】も残り数十秒、今となつては出血死か呪殺かの違いしかない。

『運がいいな。丁度援軍も来たみたいだぜ?』

「……まあ少し遅かったけどな。あつ、赤ん坊は無事か?」

『ああ、無事だぜ。モンスター共みんなへマスターへに夢中だったからな。』

今でもへマスターへの足齧ってるぜ?』

「……いや、助けるよ」

残りのモンスターも数少ない。援軍がここにたどり着くまでの間は俺の体を齧っているだろう。

鎧の個所はEND差で1ダメージも通らないのだが……。

むしろダメージをHPに変換しているのでやってることは延命措置だ。

ただ頭を齧ろうとした奴は許さん。唯一動く右腕を叩き込む。

『で、どうだったよへマスターへ。』

決意したことは貫き通せたか?』

……最後の最後でウザい奴だ。

「……ああ、悪くない。

ただアナが糞鎧ってことがよく分かったよ」

『張った押すぞ?へマスターへ。』

だがああ、気分だけは妙にいい。

「……デスペナルティあけたら飯驕ってやるよ」

『そんなの当たり前だろ。あ、あと辛いやつだぞ?』

近くへ走り寄ってくるいくつもの足音、そしてイベントクエスト達成を告げるアナウンスを聞きながら俺は瞼を閉じたのだった。

【死呪死亡】

【パーティ全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】

第7話

□王都アルテア 「槍士」グレン

ログインするとそこはデスペナルティになった（サウダ山道）とは違う場所、初めてログインした王都の噴水前だった。

俺が唯一登録してあるセーブポイントだから当たり前ではあるのだが。

左手の甲に張り付いた鎧を着た女神の紋章を軽くノックする。すると紋章から光の粒が集まり、人の形を象っていく。

「なんだよマスター。そんなに私に会いたかったのか？」

「……いや、別にずっと出てこなくてもいいぞ？ むしろノックで出てきたお前にびっくりしてるよ」

出てきたアナは初めて会った時のような姿ではない。

金髪を後ろで一つに纏め、身軽そうなファンキー風の服装をした普段着、俺がこの前買ってやった服だ。

見るのは一日ぶりのはずだが、変に久しぶりに感じる。こうして見ると意外と似合っている気がしないでもない。

「もしかして私に見惚れてるのか!？」

「……残念ながらお子様は恋愛対象外だ」

「はあ？ ぶっ飛ばすぞ、マスター」

「……何でそこでキレんだよ。意味が分からん」

やっぱりアナの考えてる事はよくわからん。だが少し以外でもある。

瞬化して一目目にしていきなりのデスペナルティだ。その上、鎧も所々派手に破損させてしまった。

ログインと同時に文句を言われるか、もしくはぐずぐず泣き出す重い女になるかと思っただが。

「……結構元気だな。意外とメンタル強いのか？」

「はあ……何いってんだよマスター。私たちはやり遂げて死んだんだ、悔いはあっても落ち込みはしねえよ。」

それに終わったことをずるずる引きずるのは私には似合わねえぜ」

ああ、その通りだ。アナの言う通りである。

悔いはある、力足らずを身をもって体験した。

だが後悔はしていない、何と言っても後悔しない道を選んだのだから。

考えるべきは次だ。

それをわかってるアナは俺よりはるかに強いのかもかもしれない。その事に思わず笑みを浮かべる。

「……よし、約束通り飯に行くか」

「カレー！ 私は激辛カレーがいいぞ！」

「……時間的には朝食だが、まあいいか」

俺の言葉にご機嫌なアナは鼻歌を歌いながら何処ともなく歩き出す。

きっとその鼻で臭いでも《探査》しているのだろう、足取りに一切の迷いもない。

俺はその後に続くように歩き出すのだった。



「それで、これから……ンぐ、どうするんだ？」

「……ほんとにお前はいきなりだよな。あと食いながら喋るな」

必死にカレーを頬張りながら喋りかけてくるアナ。

口の周りにべつとりついたカレーにため息を吐きながら、紙ナプキンを投げ渡す。

……なんだかデジャヴだ。

昨日もこうして食事をしていた気がする。

この流れだとまたへUBMと遭遇したように面倒ごととに直面する、
というのは気のせいだろう。

けっしてフリではないはずだ。

「ンぐ……ツぷはあ！ それでどうするんだ？」

食べ終わったアナが再度尋ねる。

「……まずは『槍士ギルド』で昨日報告できなかったクエストの報告
かな。

後は【群狼王 ロボータ】の討伐報酬を貰ってその金で新しい武器とアイテムを買う。

あー、あと【槍士】もカンストしてるからな。二つ目のジョブも
決めなきゃなんねえか」

「はあ？ 昨日の呪われた十字槍はどうしたんだよ？」

「……ログインして確かめたけど手持ちに無かった」

昨日の……この世界で三日前の【群狼王 ロボータ】との戦闘で活躍した十字槍。

一時的に使ったものの、やはり正式に譲り受けたわけでは無いので
元の持ち主の元に帰ったのだろう。

この場合だと俺にクエストを依頼したギルバード商行団の男の
のだ。《強奪》か《窃盗》スキルでもあれば違ったかもしれないが。

正直、未練もあるが無いものねだりはしようがない。

因みに「槍士」のジョブもログインして確認するとカンストしていた。

おかげでAGIは1250を超えていたが、まだ取り切れていないスキルもきつとあるのでしばらくはジョブクエストを受けなければならぬだろう。

「そう言えばへU B Mを倒すと特典武器って言うのが貰えるんだろ？
？ ほんなのか確認はしたのか、マスター？」

「……忘れてたな」

アナに促されるようにアイテムボックスから目当てのものを探す。
確か、「黒狼肩甲 ロボータ」とかいふアイテムだったはずだが
……。

「……あつた、これだ」

取り出すと同時に装備する。

それは名前通りの方から二の腕にかけての肩当だった。

肩当自体はロボータの毛と同じで黒一色、左肩だけには狼の頭を形どつた装飾が付いていて赤い目が輝いている。

うん、正直カッコイイ。

それにアナを装備しているときと同じく柔らかい、金属というよりは毛皮に近いのだろう。

アイテムとしての効果も以下の通り。

【黒狼肩甲 ロボータ】

エビログアイテムズ
〈逸話級武器〉

群れを率いし憤怒の巨黒狼を具現化した逸品。

装着者の膂力を増強すると共に、武器を支配する権力そのものを刻み込む。

※譲渡・売却不可アイテム

※装備レベル制限なし

・装備補正

STR+20%

AGI+30%

防御力+100

・装備スキル

《従属強化》

《武装一身》

「……これは。二日目にしてアナは知らない子かあ」

「おい！ ふざけるな、目の前で浮気しようなんてそうはいかないぞ！」

「……おい、発言に気をつけろ。それじゃあまるで俺が悪い奴みたいになりまうだろ」

店内でアナが叫んだので視線が痛い。

いくつかは俺ではなく、俺の装備している特典武器の方に向いているようだが……。

【黒狼肩甲 ロボータ】をアイテムボックスにしまい込み、席を立つ。

アナはマジ切れしているが無視だ。

素早く会計へと足を進める。

「お会計は9650リルとなります」

「……おっふ」



あれから俺たちは『槍士ギルド』でクエスト報告と【群狼王 ロボータ】の討伐報告を済ませ、王都の中心にあるセーブポイント近くのカフェでくつろいでいた。

ジョブクエストは10000リル近く稼ぐことが出来ていた上、ジョブクエストでしかとる事の出来ないスキルも多少取ることが出来た。

加えて【群狼王 ロボータ】の討伐報酬が80万リル。

「……しばらくは遊んで暮らせるなあ」

「そうだなー、これなら〈天上三ツ星亭〉にも行けちゃうぜえー」

……は？ 行かないぞ？

何を言っているんだこいつは。

しかし実際80万リルは大金である。

これなら新しい槍もかなりいいものを買うことが出来る……と意気込んでいたのだが、それも必要なくなってしまった。

クエストの報告に行った際、イベントクエストの達成報酬ももらえらるらしくギルバード商行団を尋ねたらいくつかのアイテムを貰えてしまったのだ。

具体的に行ってしまったえば、あの呪われた十字槍【鮮血無槍】である。正直、無理やり押し付けられた感はあるが断る理由も無い。呪いは解呪はしていなかったがありがたくもらい受けた。

加えて、俺に依頼をしたのが【大商人】であるギルバードさん本人だったらしく【適性診断カタログ】という結構高値のアイテムも付けてくれた。

赤ん坊一人しか救えなかったこちらとしては逆に申し訳なく感じってしまった……が、ありがたくもらい受けた。

お金はあるには越したことはないのである。

「……まあ、予備の武器と高性能なアイテムポーチ、後は【鮮血無槍】の呪いの解呪で粗方使い切ってしまうか」

「マスターは意外と金遣い粗いよな」
「……必要経費と言え、必要経費と」

金の使いみちは決まった、今後の方針も凡用スキルの取得&レベル
上げで問題ない。

問題は、

「……次のジョブをどうするかだな」

これこそが問題だ。

ジョブの決定は将来性を決める事でもある、とネットに書いてあつたぐらいだ。へエンブリオもジョブの影響を受ける事があるらしいので馬鹿にはできない。

実際、始めたばかりでも下級職ならば就ける職は100以上存在する。

【槍士】に就いたのは間違つてはいなかったと思うが、これからはよく考えて何に就くか決めなくてはならない。

「……アナはどれが良いと思う？」

「そんなの上級職に決まってるだろ。私はこの【フルアーチャー・ジャイアント鎧 巨人】つての
のがいいと思うぜ、何だか私に合ってる気がする！」

自信満々に言い放つアナ。

確かに【鎧巨人】は数少ない転職条件を満たしている上位職ではあるが。

(可哀そうに……)

残念ながら名前とは裏腹にアナには合わないジョブである。

【鎧巨人】はたしか、鎧自体の防御力を元に防御力を上げるジョブ。アナの様にへエンブリオのスキルとステータス補正で防御力を上げているタイプでは……。

「……」

「な、なんだよ！ 文句あるのか！」

「……まあ、よく考えてからにしよう」

暖かな視線を送りつつ、「適性診断カタログ」へと目を移す。

しかしできれば今の俺達の弱点を防ぐことのできるジョブに就きたい。

では、俺たちに足りないものとは何か？

「足りないもの……防御力だな！」

ナチュラルに心を読んできたアナだが、实际的をえている。

アナの「エンブリオ」としてのENDのステータス補正は高めなもの、【槍士】だったので大して上がっていない。

前回の様に自身より弱いモンスターの攻撃をちまちま受けて、防御力を上げる手段も一対一では使えない。

敵の攻撃を耐えることが出来ればある程度の勝ち目が見えてくるというものだ。

「……防御力っていうなら【騎士】^{ナイト}、もしくはその上級職である

【聖騎士】^{パラディン}、【大騎士】^{グレイト・ナイト} 辺りが有力だけど……やっぱり無理だな」

【聖騎士】には《聖騎士の加護》というダメージ軽減のパッシブスキルがあり、アルター王国でしか就けないジョブなので人気がある。

だがアナのスキルはジョブによるダメージ軽減も上乗せできるわけではない。この場合は上乗せのダメージも減ってしまうだろう。

【大騎士】はダメージ軽減スキルがない代わりに、STRも多少伸びがいい。だけど転職条件に【騎士】のカンストが含まれていたのだから下だ。

「じゃあ【槍士】系統は？ 防御力はいつそ捨ててしまえばいいん

じゃないか？」

「……それ、お前自身の存在価値を否定してないか？」

今更気が付いたのか焦った顔をする。

本当に頭の弱い子である。

しかし就きたいジョブはあらかじめ決まった。

「……よし、グレイデューター 闘士系統のジョブにするか」

「え？ 何でだ？」

「……闘士系統のジョブは装備枠を増やすことができるんだよ。せつかくの特典武具もこのままじゃ装備出来ないしな」

「え？ 装備なんて私だけで充分だろ？」

「……え？」

「……」

何だこの気まずい雰囲気は。

まさか本当に「防具は自分だけで充分だ」とか思っていたりしたのだろうか。

所持スキル一つの上、防御力は紙同然。挙句の果てに装備枠を四つも埋める糞鎧なのに？

涙目のアナに優しく笑いかけながら慰める。

「……嘘だよ。アナは鎧っていうよりパワードスーツだからな、装備枠を増やした方が効率的っていう話だよ」

「そつ、そつだよな！ その通りだよな！」

ロボータを倒せたのも私のアシストあってのものだしな！」

……ちよろいなー、なんて言葉は決して口には出さない。

しかしやはり、装備枠を増やすのは俺たちにとっては必須だ。闘士系統の下級職をカンストさせた後は、気長に他の国を回りながら独自のジョブを見付ける旅にでも出れば噛み合ったも見つかるだろう。

「……よし、そうと決まれば早速行くか」

「行くってどこにだよ」

そんなの決まっている。

闘士系統に就けるのは闘技場にあるジョブクリスタルからのみ。
そしてアルター王国で闘技場といえは一つしかありはしない。

「……『決闘都市』ギデオンだよ」

まだまだ旅は始まったばかりなのであった。

第8話

□〈へサウダ山道〉【槍士】グレン

王都アルテアへのログインより一日後。

俺とアナは『決闘都市』ギデオンへ向けて〈へサウダ山道〉を歩いていた。

出現するモンスターも弱い上に途中までは一度走った道だ。道に迷うこともなく、襲い掛かってくるモンスターを倒しながら進んでいく。

「なあマスター、なんでいちいちギデオンまで歩かなきゃなんねえんだよ。」

別に竜車に乗ることも出来ただろ？」

隣を歩くアナが拗ねたような顔で愚痴たれる。

今のアナは全身鎧形態ではない、『メイデン』特有の人型形態だ。

今装備している【鮮血無槍】と特典武器の【黒狼肩甲 ロボータ】だけれども戦力としては過剰だったので、話し相手になってもらう為装備せずに隣で歩いていた。

〈エンブリオ〉であるアナを装備せず【黒狼肩甲 ロボータ】を装備しているからだろうか、アルテアを出てからずっとこんな調子である。

「……スキルのレベル上げと肩慣らしだよ。片腕で槍を使うのに慣れすぎちゃったからな」

「でもそれだと夜までに向こうに着かないぜ？ まさか夜も歩き続けるつもりなのか？」

「……まあ、野宿も一回ぐらいしてみたいだろ？」

「はあ？ 私は絶対嫌だぞ。」

それにそんな事言つて、真夜中にへUBMに襲われてもしらねえぜ？ まだ【大瘴鬼 ガルドランダ】とかいうへUBMもいるらしいしな」

……フラグか？

なんだか、アナは事あるごとにフラグを立てている気がする。

流石に同じへサウダ山道で二度もへUBMに会うことなど無いだろう。出会ってしまったら、それはもう奇跡だ。

……因みにこれはフラグではない。

「……そう言えば【群狼王 ロボータ】はへUBMでも逸話級っていう、最弱の部類らしいぞ？」

「はあく。【大瘴鬼 ガルドランダ】に出会ったら、十中八九マスターは死ぬな」

「……言つとくけどお前も道づれだかん？」

しかし実際、出会ってしまったら確実にデスペナルティになるだろう。そんな出歩く度に死にかけていてはたまらない。

『掲示板』でもよく情報が流れているが、上級職のへマスターのパーティーでもよく死んでいるみたいだ。

それでも諦めずへUBMを探しては挑み続けているへマスターもいるようだが。

しかし逆にあれほど強かった【群狼王 ロボータ】が逸話級なら、噂に聞くへSUBMの【三極竜 グローリア】を見てみたくもある。そんな事を考えながら【テイルウルフ】や【ロックリザード】を倒していく。

「なあマスター、なんか楽しい事話そうぜ。流石に暇すぎる」

暇すぎたのだろう。

いつも通り唐突にアナが話しかけてくる。

「……ギデオンに着いてからの事でも考えとけよ、この周辺で一番大きな闘技場があるらしいぞ?」

「へえー、いいな! 私たちも決闘ランカーに名を連ねるか!」

「……そうだなあ、それもいいかもな」

今の俺達は対人戦をしたことが無い。

そう言う意味では、死んでもデスペナルティにならない闘技場での決闘はもってこいだ。

闘士系統につくのだから『闘士ギルド』でのジョブクエストもあるだろう。

とは言ってもジョブクエストを受ける利益は小さい。闘士系統というジョブはジョブ特有のスキルが比較的少ないからだ。

闘士系統の特徴としてMP以外のステータスが満遍なく伸びる事、そして全ての武器種が使用可能な事が上げられる。逆に他の専門職よりは力は発揮できないという欠点もある。

もとより装備枠を増やすことが目的の俺からしては気にすることでは無いのだが。

「……まあ暇つぶしだからな。レベル上げにしろ、決闘にしろのんびりやるさ」

「おう、食って歩いたりもしたいしな!」

俺の言葉にアナが同意する。

そんな事を他愛もない会話を交わしつつ、日が暮れるまで歩き続けたのだった。



「本当に何も出なかったな。私は本気で〈UBM〉に遭遇するぐらいの事は起きると思ってたんだが。」

もしかしてこれから現れるのか?」

「……勘弁してくれ。お前が言うのと現実になりそうで怖い」

不思議そうに首を傾げ、焚火に小枝を放り込むアナ。

その横で俺は一人、黙々と手に入れたアイテムを弄りながら返事を返す。

そんな俺達の周りには明るく遠くまで見渡せていた景色は見当たらない。日が沈み、夜の静かな闇が辺りを覆い隠していた。

アルテアの夜とは大きく違い、数メートル先しか判断がつかない。

《暗視》でも無ければまともに戦闘はできないだろう。

だが一日歩き続けたからか、すでに〈ネクス平原〉まで辿り着き障害物が少ないため見渡しがよい。

古物商でかったモンスター除けのマジックアイテムも買ったのでそうそう襲われることは無いはずだ、それこそ〈UBM〉にでも出会わない限り。

「ところでマスター、さつきから何してんだ?」

焚火を弄るのに飽きたのか、覗き込むように近寄ってくる。

しかしアナが気になるような事は何もしていない。

「……《鑑定眼》のスキルのレベル上げだよ」

実は王都での【鮮血無槍】の浄化依頼が終わるまでの間、《鑑定眼》をとるためのアルバイトをしていたのだ。

パーティーで動くなら大抵【斥候】^{スカウト}がいるのだが生憎俺は独り^{ソロ}。

その為、こういった基本的なスキルは一人でとらなければならぬ。^{い。}

本当は《殺気感知》、もしくは《危険察知》といったスキルが欲しかった。

たが流石に時間が足りなかった。

なので《鑑定眼》を使えるレベルまでレベルを上げているのだ。

「はあー、マスターも大変だな。そんなつまらなきそうな事しなきゃならないなんてよ」

「……お前もなんかスキルでも取ってくれば楽になるんだけどな。メイデンでも取れるスキルはあるし取ってみたらどうだ？」

「げえ……やだぜそんなの、マスターがやってくれ」

アナは肩を上げながら首をすぼめ、焚火から暗闇へと歩き出す。

「……どこ行くんだ？」

「散歩だよ、散歩。今日一日何もして無くて体力が有り余ってるんだよ」

「……遠くまで行くなよ？ 襲われても知らないぞ？」

「わかってるよ。マスターが〈UBM〉にやられる前には戻って来るって」

……そのまま襲われてしまえばいいのに。

闇へと消える後姿を見送るながらひそかに呪う。

しかし思っていたよりも詰まらない旅になってしまった。〈UBM〉とは言わないがもう少しハプニングがあってもよかったのだが。

今でもモンスターの声らしき唸り声は聞こえるが、全く姿を見せる気配はない。高額だったマジックアイテムが値段に見合う働きをしているからだろう。

具体的な値段は言わないが【群狼王 ロボータ】の討伐報酬が半分消し飛んだぐらいだ。

かなり性能がいい。

「……まあ、たまにはこんな日があってもいいのかもな」

今にしてみれば、まだこの世界に来てから三日目である。
むしろ今まではハプニングが多すぎたのだ。

一日目で下級職をカンストなどガチ勢でもそうそうできないだろう。

加えていきなりへU B Mに挑むなど狂人のやることである。

……いや、ゲームならボスへの死に戻り前提のチャレンジなど当たり前だろう。こう考えてしまうのはやはり、この世界をゲームだと思っていない証拠かもしれない。

「おーい！ マスター！」

聞こえてくるアナの声に我に返る。

どうやら無意識に考え込んでいたようだ。

アナの声のする方へ顔を上げ……

「……ちよつと待て、そこで止まれ」

「何でだよ？」

「……なんでだよ、じゃねえよ。その手に引きずってるのは何だかって聞いてんだ」

「ああ、これか？ 私が拾ったんだ、従魔にしようぜ！」

アナはそう言って手に引きずった人型の何かを俺に見せる。

なるほど、確かに泥だらけでぐったりとして死んでいるようにも見える。おまけにへんな唸り声が聞こえてくるので完全にゾンビか何かのモンスターにも見えなくはない。

だが、

「……それ、何か分かってるか？」

「はあ？ グールかゾンビじゃねえの？」

正直、ゾンビやグールを従魔にしようとしたアナにドン引きだが……今それは関係ない。

「……いや、それへマスター」
「え？」

左手にはへマスターの証である「本を象った紋章」が輝いている。
絶対にグールやゾンビなどと言った名前ではない。

「……今すぐ元の場所に返してこい。そいつが起きる前に」
「……そうだな、うちはペット厳禁だつて言われたしな。
しつかり返してこよう、起きる前に」

……オエツト厳禁などとは一度もいったことは無いがその通りだ。
従魔候補のモンスターならともかく、へマスターは駄目だ。
俺も協力して、起きないように運び出し……

「う、うくん……つてあれ？」
「ふっ！」

見事、目覚める前に投げ捨てる事に成功したのだった。